

日本中世禅林における柳宗元受容

その過程と問題点

(漢文学研究室) 太田 亨

はじめに

日本における漢文学史上、中国からの文学作品の受容が顕著に現れた時期として、貴族の漢詩文に代表される奈良・平安時代の第一期、禅僧の漢詩文に代表される鎌倉時代末期から室町時代の第二期、儒学者の漢詩文に代表される江戸時代の第三期があげられる。この三つの時期の中で、第二期にあたる鎌倉・室町期における禅僧の作品は、その存在を認められながらも、長く敬して遠ざけられていると言えよう。

現在に至り、著名禅僧の伝記や、著名文筆僧の作品そのものに対する考究は少しく進んできた。しかし、中国から文学作品がどのように日本に移入され、日本でどのように受容されていったかという一連の過程について、広い視野からの考究は進んでいないと言える。

そこで本稿では、まず禅林において中国文学作品を受容するに際し、どのように作品が選定され流布したのか、禅僧がそれをどのように利用して解釈を深め、さらに自身の詩文製作に活かしていったのかについて概説する。その上で、数ある作品の中から具体的に柳宗元の作品を取り上げ、その受容過程と問題点について検討する。

一、日本中世禅林における文学作品受容の概略

中国における文学作品は、日本禅林にどのように伝来し、日本禅林においてどのように流布したのであろうか。まず中国における文学界の状況について見てみたい。

中国では宋代より、歴代の文人の詩文集を整理し、さらにこれらに注釈を付けることが頻繁に行われ、数多くの別集が編まれた。例えば、杜甫の詩には数十種の注釈(書)が製されており、他にも陶淵明・韓愈・柳宗元・蘇軾・黃庭堅といった文人にも数種の注釈(書)が製されている。これら特定の文人の詩文に対する注釈が製される背景には、当期の文学界における風潮が反映している。宋代になると、文人同士が歴代の詩文について議論して評価するということが頻繁に行われ、それらを集めた詩話が製されるに至った。『温公統詩話』

(司馬光著)・『後山詩話』(陳師道著)・『六一詩話』(歐陽修著)・『韻語陽秋』(葛立方著)・『後村詩話』(劉克莊著)・『歲寒堂詩話』(張戒著)・『誠齋詩話』(楊万里著)・『石林詩話』(葉夢得著)・『竹坡詩話』(周紫芝著)・『唐子西文錄』(強幼安著)・『二老堂詩話』(周必大著)・『冷齋夜話』(釋惠洪著)・『滄浪詩話』(嚴羽著)等の詩話が製されている。これら多くの詩話の中で議論の中心となっているのが杜甫であり、次いで蘇軾・柳宗元・韓愈等の、注釈書が成立して

いる文人なのである。

別集の種類が膨大になると、優れた作品を選び、それらを編集した総集が製されるようになる。宋代から明代にかけて、『三体詩』（周弼輯）・『唐音』（楊子弘輯）・『唐詩鼓吹』（元好問輯）・『古文真宝』（輯者不明）・『文章正宗』（真德秀輯）といった総集が編まれている。同様に、詩話についても、『詩人玉屑』（魏慶之輯）・『茗溪漁隱叢話』（胡仔輯）といった総集が編まれている。『茗溪漁隱叢話』前集に限って見ると、文人ごとに詩話を編集しており、全六十巻中、杜甫（巻六～十四）九巻・蘇軾（巻三十八～四十六）九巻・王安石（巻二十三～三十六）四巻・韓愈（巻十六～十八）三巻・黃庭堅（巻四十七～四十九）三巻を占めている。

以上のように文学界の動向は変化した。後世の文人たちは詩話集を読むことで、著名な文人と作品を把握し、それらの特徴を理解した上で、さらに注釈のついた詩文集によって読解を深めることができるようになったのである。

社会情勢に目を向けると、宋代末期における中国国内の情勢は、モンゴル勢力によって混乱、荒廃したため、中国禅僧は国内での活動に危惧を覚え、新たな活動場所としての新天地を求めていた。折しも日本では、旧仏教界が飽和状態を起し、多くの宗派が乱立して覇を競うようになり、幕府を脅かす存在になりつつあったため、幕府はそれらに対抗する新たな宗教勢力を求めていた。ここに、新宗教勢力を求める日本幕府と、平穏な土地で布教活動を望む中国禅宗界の要求が一致し、中国禅僧と日本禅僧の往来が活発化するのである。^①

日本において、禅宗伝来当初は、不立文字・以心伝心といった宗旨を遵守する気風が強かった。しかし、禅宗が広まり、禅林社会の勢力が大きくなると、それを維持するために禅林は幕府や貴族の庇護を求めるようになる。幕府や貴族も、仏事法語や外交文書の作製のために、漢文の素養を必要とし、それを禅林に求めるようになる。こうして両者の思惑が合致し、結びつきが緊密になる。

幕府や貴族は、殊のほか中国の最新の禅宗文化、就中文学に対して大いに関心を抱いていたため、中国からの渡来僧、及び中国に渡り彼の地の文学を吸収してきた僧を重宝するようになるのである。

日中の交流が活発になると、彼の地の作品集も盛んに流入される。彼の地の斬新な文学は禅僧を魅了し、多くの禅僧が自身の詩文製作に活かすため、宗旨から離れて文学習得に励むようになる。その傾向は既に南北朝時代に顕著に現れる。鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて活躍した虎関師錬は博識で知られるが、その著書『濟北集』詩話の中では、陶淵明・李白・王羲之・杜甫・元稹・白居易・王維・孟浩然・韋応物・韓愈・柳宗元・黃庭堅・蘇軾・林和靖・王陽修・梅聖俞・王安石・楊萬里等の作品に関する記述や、『詩人玉屑』・『茗溪漁隱叢話』・『古今詩話』といった詩話集の引用が見られる。これらは当時期の中国文学界の影響の反映と解される。

多くの禅僧が外集習得に励み、その結果、中国の詩文集に対する需要が高まってくる。中国より将来した書だけでは足りなくなる。そのため、日本においても中国の印刷技術を導入して、印刷が盛んに行われるようになる。こうして五山を中心として開版された版本を総称して五山版と呼んでいる。仏典や中国僧の語録等が刊行される一方で、中国の文人の詩文集も多種にわたって刊行されている。集部积氏以外の五山版には杜甫・韓愈・柳宗元・胡曾・蘇軾・黃庭堅・陳与義・楊万里・陸游・趙孟頫・范梈・揭傒斯・虞集の別集、『三体詩』・『唐朝四賢精詩』・『江湖風月集』・『唐宋千家聯珠詩格』・『中州集』・『皇元風雅』・『金玉編』・『澹游集』・『古文真宝』・『雅頌正音』といった総集、『詩人玉屑』・『詩法源流』といった詩話集が選ばれている。^②

五山版が刊行されることで、禅僧が大陸の文学を消化する下準備がようやく整ったことになる。詩文集の作品を読解するに当たり、作品に付されている注釈を丹念に理解し、辞書の役割を担った韻書や類書を利用し、他の作品と比較

しながら作品理解を深めていく作業が行われた。やがて、禅僧間において作品解釈についての議論・講義活動が活発になるのである。現存する五山版作品集の中には、禅僧が解釈のために行った書き込みや講義録が書き記されていることがしばしば存する。出版事業の拡大は、中世禅林における漢文学の受容を一変させた大きな原因の一つなのである。

時代が下ると、様々な議論・講義活動の下、各作品に対する読解が進み、禅林における解釈が溢れ、ついには中国詩文注釈には見られない禅僧独自の解釈が生まれるようになる。禅僧はそれらの解釈を、備忘のため、さらなる解釈深化のため、また後世の僧に示すために、便宜をはかって書き記しておくようになる。これを一般に抄物と呼ぶ。この場合の「抄」とは注釈という意味である。現在、杜詩抄・柳文抄・長恨歌琵琶行抄・胡曾詩抄・東坡詩抄・山谷詩抄・瀟湘八景詩抄・蒲室集抄・全相二十四孝詩選抄・三体詩抄・中興禅林風月集抄・江湖風月集抄・文選表解・古文真宝抄・聯珠詩格抄・唐宋時賢千家詩選抄等、様々な作品に関する抄物が残されている。

禅僧は早くから多くの文学作品を消化し、禅僧自身が詩文作品を詠出している。南北朝時代には既に虎関師鍊(『濟北集』)・中巖円月(『東海一漚集』)・雪村友梅(『岷峨集』)・夢巖祖応(『早霖集』)・義堂周信(『空華集』)等、名だたる禅僧が自身の文学作品を製している。この傾向は時期が降り、外集受容が深まるにつれ一層強くなり、室町時代末期になると、多くの禅僧が作品集を製するようになる。

以上が、中国の文学作品が日本禅林に伝来してから、禅僧が作品を詠出するに至るまでの概略である。次項以下では、中国における一人の文人の文学作品に着目し、いかに禅林に伝来して浸透したのか、その深化の過程を見てみたい。

二、中国における柳宗元の作品に対する評価

代表として取り上げるのは柳宗元である。まず、柳宗元という人物について簡単に紹介する。

柳宗元は、字を子厚、大暦八年(773)に生まれ、元和十四年(819)に没した。中唐を代表する文人である。貞元九年(793)、二十一歳の時に進士に及第し、青年期に中央の政界で活躍する。しかし、政争に敗れ、貞元二十二年(805)、永州に左遷され、この地で十年間滞在した後、元和十年(815)、今度は柳州に左遷され、その地で生涯を終える。僻地に左遷された間、自然に親しみ、禅宗にも深く傾倒する。不遇な境遇の中で、数多くの詩文作品を製し、それらが今日に伝わっている。数多くの山水詩を製しているところから、山水詩の祖と称され、同時に古文復興を提唱した人物として高く評価されている。

柳宗元の作品は、死後、その友人の劉夢得が編集し、世に行われたとされる。南宋時代においては種類の別集が編まれており、『柳文音義』『詁訓柳先生文集』『増広注釈音弁唐柳先生集』『新刊増百家詳補注唐柳先生文』『五百家注唐柳先生集』が刊行されている。柳文集の基礎を作ったとされる穆修は、『唐柳先生集後序』の中で次のように述べている。

唐之文章、初未去周隋五代之氣、中間稱得李杜、其才始用為勝、而号專雄而不雜。歌詩、道未極渾備。至韓柳氏起、然後能大吐古人之文、其言與仁義相華実

唐の文章は、初め未だ周・隋・五代の氣を去らず、中間に稱へて李杜を得、其の才始めて用ひられて勝と為し、而して專雄の歌詩と号すも、道は未だ渾べて備ふるを極めず。韓・柳氏の起るに至り、然る後能く大ひに古人の文を吐き、其の言は仁義と相華実して雜らず。

ここでは、韓愈と柳宗元の出現によって古人の文を大成し、仁義を含み、形式と内容ともに優れた文章を創出したことを述べている。

宋の蘇軾は「答程全文推官」（『東坡統集』卷七）で次のように述べている。

流転海外、如逃深谷、既無與晤語者、又書籍拳無有、惟陶淵明一集、柳子厚詩文數冊、常置左右、目為二友。

海外に流転し、深谷に逃ぐるが如く、既に與に晤語する者無く、又書籍は拳するも有ること無く、惟だ陶淵明一集、柳子厚詩文數冊、常に左右に置き、目して二友と為すのみ。

蘇軾が中国の南端、現在の海南島に流されていたとき、程全文に送った手紙である。左遷された蘇軾にとって、陶淵明と柳宗元の作品集は唯一の慰めとなつたようである。このことは、後の陸游も詩話『老学庵筆記』卷九において言及している。

東坡在嶺海間、最喜讀陶淵明・柳子厚二集、謂之南遷二友。

東坡 嶺海の間に在りて、最も喜びて陶淵明・柳子厚の二集を読み、之を南遷の二友と謂ふ。

蘇軾が海南島に流されていたときに柳宗元を愛していたという逸話は流布していたようである。

また、呂本中は詩話『童蒙詩訓』で次のように述べている。

韓退之文渾大広遠難窺測、柳子厚文分明見規模次第。学者當先学柳文後熟讀韓文、則工夫自見。

韓退之の文は渾大広遠にして窺測し難く、柳子厚の文は分明にして規模次第を見る。学者は當に先づ柳文を学びて後に韓文を熟読すれば、則ち工夫自ら見るべし。

韓愈の文章が純一で大きく広がりを見せるのに対し、柳宗元の文章は文意が明らかであり、論の構成が優れているとする。そのため、文章を学ぶに当たっては、まず柳宗元の文を学び、次いで韓愈の文を学ぶべきだという。

宋代において、柳宗元作品に対する評価は高く、著名文人が愛玩するところ

となっていた。こうした風潮が中国のみならず日本にも強い影響を与えたと思われる。

三、柳宗元集の日本禅林への移入

中国宋代において、柳宗元に対する評価は高く、種類の別集が編まれていることが判明した。上述のごとく、中国禅林と日本禅林との交流が活発化すると、中国文学界の風潮を反映しながら、多種の作品集が流入することとなり、柳宗元の作品集もその一つに含まれていた。

文章家の代表として名高い柳宗元の作品集は、いち早く考究の対象となったようである。それは蓬左文庫に所蔵される『増廣註釈音辯唐柳先生集』に見て取ることができる。この書は写本であり、本文には訓点が施され、若干の奥書を含んでいる。卷四十三末奥書には次のようである。

此詩兩卷論談後移朱点而已。正和元年十一月九日志於武州金沢之学校。近江州人事聡達行年三十三。

此の詩の兩卷は論談の後 朱点を移すのみ。正和元年十一月九日 武州金沢の学校に志す。近江州人事の聡達 行年三十三。

また附録末の奥書に次のようである。

正和元年九月廿七日、於武州六浦金澤学校書写畢。但中間四十二遺乏。追可書歟。江州貫人破僧聡達、行年三十三、誌之。

正和元年十月三日、講畢。遺四十二之卷。
正和元年九月廿七日、武州六浦金澤学校に於いて書写し畢る。但し中間の四十二遺乏す。追ひて書すべきか。江州貫人破僧聡達、行年三十三、之を誌す。

正和元年十月三日、講畢。四十二の卷を遺す。

附録末の奥書は二度にわたって書き記されている。まず最初の奥書きで、正和

元年（一三二二）九月二十七日に聡達なる僧が武蔵国の金沢学校において書写し終わるが、巻四十二と四十三は残っており、後に追記する必要を言う。そして二度目の奥書きで、十月三日に講義を終えたが、巻四十二と四十三を書き記していないとする。次いで、巻四十三末を見ると、十一月九日、両巻の訓点を書き記し終わったとあり、本書が成立したことを伝えている。

考究の痕跡が残っているものとしては早い時期に当たり、まだ日本において柳宗元の作品集が刊行されていない頃、書写して自身のテキストにしていたことが分かる。巻四「弁文字」には次のように墨書による訓点が施されている。

文字書十二篇、其傳曰、老子弟子。其辭時有^レ可^レ取、其指意、皆本老子^一。然考其書^一、蓋駁書也。其渾而類者少、竊取他書以合^{スル}之者多。凡孟子輩數家、皆見^ラ剽竊^セ、曉然而出其類^一。其意緒文辭、又牙相抵而不^レ合。不知人之增益^{スル}之歟。或者衆為聚斂^{ナシ}、以成其書^一歟。然觀^ニ其往^レ有^レ可^レ立者^一、又頗惜^ム之。憫^ニ其為^レ之也^一。今刊去謬惡亂雜者^一、取其似是者^一、又頗為發其意^一、藏^ニ於家^一。

これらの訓点を見て分かるように、柳宗元の作品集が流入した当初より、まずは訓読をして作品を理解していたことが分かる。その訓読方法に関しても、既に現在と同様の手法がなされていたようである。

また、当時期に流入していたテキストが『増廣註釈音辯唐柳先生集』（以下『音弁本』と略称）であることも判明する。ただし、巻二の奥書には次のようにある。

増廣註釈音弁本無披沙揀金・迎春日・記里鼓之三賦。今以音註本而写加之。音註云、今賦三首之目錄。

『増廣註釈音弁本』に披沙揀金・迎春日・記里鼓之三賦無し。今『音註本』を以て写して之を加ふ。『音註』に云ふ、今賦に三首の目錄を躡す、と。

『音弁本』と同時に『音註本』も日本に流入していたことが分かる。『音註本』

がいかなる書であるかは定かではない。

中世禅林初期（鎌倉時代末期から南北朝時代末期）においては、『音弁本』や『音註本』を用い、訓読をして柳宗元の膨大な作品を読解していた様相が窺える。中国において高く評されている作品を、いち早く吸収しようとしていたことが分かる。

四、五山版の刊行

日本において印刷技術が発達していない時期においては、上述のように中国側刊本の別集を書写しながら考究を重ねていたようである。宗旨から逸脱し、外学に耽る禅僧が増えると、作品集の需要が高まり、五山版が刊行されるようになる。杜甫・韓愈・蘇軾・黄庭堅といった別集が五山版として刊行される中、柳宗元の詩文集『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』（以下『五百家本』と略称）も刊行されている。後述する『柳文抄』の「序」には次のようである。

日本へハ音辯本カ最初ニ来。其後五百家来カ、五百家ニハ孫注カワルイ事ヲシタ。近比音義本来、此ハ重宝也。音辯本ハ无用也。韓文考異本ハ朱熹カ考ヘタホトニ最重宝也。

宋代に数種の柳文集が製されたが、日本禅林には、『音弁本』↓『五百家本』↓『音義本』の順番で、三種の注釈書が伝来したことが分かる。『音弁本』は『増廣註釈音辯唐柳先生集』、『五百家本』は『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』、『音義本』は現在佚書である『柳文音義』のことである。

『五百家本』は、南宋時代、魏仲拳が慶元六年（一一〇〇）に刻刊し、正集四十五卷・外集二卷・新編外集一卷・龍城録二卷・附録四卷より構成される。内容については、『音弁本』に比べて新しいだけでなく、注釈の量が格段に多く、しかもその注釈には典故ばかりでなく、内容解釈に即したものを多分に含んでいる。日本でも五山版として刊行され、正集四十五卷・首一卷で構成され

ている。刊記には次のようにある。

祖在唐山福州境界。福建行省興化路莆田縣仁德里台諫坊住人兪良甫、久住日本京城阜近、幾年勞鹿至今喜成矣。歲次丁卯仲秋印題。

祖は唐山福州の境界に在り。福建行省興化路莆田縣仁德里台諫坊の住人・兪良甫、久しく日本京城阜の近くに住し、幾年の勞鹿、今に至り、成るを喜ぶ。歲次丁卯仲秋印題。

ここで言う「勞鹿」「勞累」「勞累」の意で、莆田県の方言である。中国から渡来した刻工・兪良甫が、「丁卯」つまり嘉慶元年（一三七八年）に京都嵯峨において刊行したことが分かる。

五山版『五百家本』は、現在においても他の五山版に比べて比較的多く残っている。確認される所蔵機関には、内閣文庫所蔵（二五冊）・国会図書館所蔵（二一冊）・書陵部所蔵Ⅰ（二三冊）・書陵部所蔵Ⅱ（一六冊）・東北大学所蔵（二七冊）・静嘉堂文庫所蔵（二三冊）・大東急記念文庫所蔵（二二冊）・成篋堂文庫所蔵（二〇冊）・天理図書館所蔵（一四冊）・龍谷大学所蔵（二七冊）・杏雨書屋所蔵（二二冊）・国立民俗博物館所蔵（四七冊）・一誠堂所蔵（二八冊）・東洋文庫所蔵Ⅰ（一一冊）・東洋文庫所蔵Ⅱ（二〇冊）・三井家旧蔵（一九冊）・陽明文庫所蔵が存在する。

五山版『五百家本』が世に広まることによって、柳文読解が深まり、独自の見解が示され、遂に講義活動が盛んに行われるようになった。こうした柳文解釈の際に行った記録を五山版に書き込むことも起こり、現存するいずれの『五百家本』にも訓点が付されている。中には膨大な量の書き入れがなされているものがあり、ここでは、東北大学に所蔵されている『五百家本』巻四「弁文字」を例としてあげる。書き入れ箇所については番号を付し、本文の後に書き記した。

「弁文字①」

文字書十二篇、其傳②曰、老子弟子。其辭時有若レ可レ取、其指意③、皆本レ老子。然考レ其書、蓋駁書也④。其渾⑤而類者⑥少、竊取レ他書、以合レ之者多。凡孟管⑦輩數家、皆見レ剽⑧竊、峴然トシテ而出レ其類⑨。其意緒文辭、又牙相抵而不合、不知人之増益之歟⑩。或者衆為レ聚斂、以成レ其書歟⑪。然觀レ其、往往有可レ立者⑫、又頗惜レ之⑬。憫ニ其為レ之也勞⑭。令刊ニ去謬惡乱雜者⑮、取ニ其似是者⑯、又頗為發レ其意⑰、藏於家⑱⑲。

〈書き入れ〉

①慈溪黃氏曰、文字者云、周平王時、辛銓之字、即范蠡之師計然、嘗師老子、而作此書。其為之註與序者、唐人默希子、而號其書曰通玄真經。然偽書爾。孔子沒於周平王幾百年、及見老子。安有生於平王之時。已先能師老子耶。范蠡戰國人、又安得上師平王之文字耶。此偽一也。老子所談者清虛、而計然之所事者財利、此偽二也。其書述皇帝霸、而霸乃伯爵之令、皆秦之事、而書以為老子之言。此偽四也。偽為之者、殆即所謂默希子、而乃自匿其姓名歟。傳注、計然者、范蠡之師也。名研。故諺曰、研桑心筭。蔡謨云、所著書名計然、蓋非也。吳越春秋、謂之計倪。漢書古今人表、計然列在第四、則倪之與研、是一人、声相近而相乱耳。又曰、范蠡既雪會稽之耻、乃喟然而歎曰、計然之策第七、越用其五、而得意。既已施於國、吾欲用之家、乃乘扁舟、浮於五湖。

宋景濂云、文字十二卷、老子弟子所撰、不知氏名。徐廣曰、名銓。李暹曰、姓辛、葵丘濮上人、號曰計然。范蠡師事之。裴駟曰、計然、姓辛、字文字。其先晉國公子也。孟康曰、姓計、名然。越臣也。蔡謨曰、計然者、范蠡所著書篇名、非人也。謂之計然者、所計而然也。顏師古曰、蔡

説謬矣。古今人表、計然列在第四等、計然一名計研、吳越春秋、及越絶書、並作計倪。倪與妍然、三音皆相近。故訛耳。諸説固辯矣。然是書、非計然之所著也。黃氏為唐徐靈府作、亦不然也。抑因裴氏姓辛字、文字之説、誤指為范子計然十五卷者歟。

②注也。

③二字董仲舒策。

④雜也。

⑤不出一乎。如出衆口非一氣類也。

⑥或云、純類老子者少。

⑦管子八十六篇。管或作子。

⑧剽、強取也。又剽劫。

⑨孟子管子之詞、嶢然云其類也。孟管之詞、高而不類、故又牙不合也。

⑩別人增益^{スルカ}文字^ヲ、又文字多聚^{ルカ}他書歟。

⑪一説衆人。一説衆多。言文字聚斂他人之書、以為一家之書歟。借用論語求也。聚斂二字。

⑫立言。言有立而可行者也。

⑬好处難捨。

⑭其字十二。

⑮總數百三十七字。

⑯言注之。

⑰藏於子厚之家。柳私或注或削、故許外見。

本文については、詳細な訓点が施してあるほか、ルビが付してあり、読者の便宜を考慮している。

書き入れについては、①は題名に関する注記であり、二段落で書かれている。

第一段落は『黃氏日抄』卷五十五及び『史記』卷百二十九より引用している。

第二段落は『文憲集』卷二十七より引用している。②～⑯については、語句の解釈、字の異同、書き入れ者の感懐が書き記されている。書き入れに訓点を付している場合もある。

本文に訓点を付し、さらに『五百家本』の注解に満足せず、解釈に必要な典故、異同の資料、独自の解釈を書き入れている。柳宗元詩文に対する読解が深まっていることが窺える。

東北大学蔵本には、後述する抄物からの引用も多々見られる。書き込まれる内容には、書き入れ者が訓点とともに解釈を書き入れる場合もあれば、柳文に關する講義録（抄物）をそのまま抜き出して書き入れる場合も存する。

五山版に禅林で行われた柳文講義録が書き入れられているものとして、書陵部本Ⅰと国立民俗博物館本と東洋文庫本Ⅱが存する。これらの五山版『五百家本』の書き入れを説明することによって、当期の柳文解釈の実態が明確になることが予想される。

五、抄物の誕生

五山版『五百家本』が流行し、多種多様の柳文解釈が行われるようになると、便宜をはかってそれまでの解釈を整理するようになる。こうして書き留められたものが、建仁寺両足院に所蔵される『柳文抄』である。

『柳文抄』は『五百家本』を底本として抄されている。全六冊で構成され、卷十四・三十九・四十四・四十五に対する抄を欠く。第六冊の奥書より、永祿八年（一五六五）、林宗二が六十八歳の時、禅昌院の健公首座所有の本を借用して不休庵において書写したことが分かっている。ただし、抄者（第一書写者）が誰であるのか判明しておらず、その中身の実態が不明である。『柳文抄』には当期に行われた禅僧の解釈が記載されており、柳文読解の深化の痕跡を見て取ることができる。以下では、前項と比較するために、卷四「弁文字」を例と

してあげる。

文字ヲモ宋景濂弁シタ。黄氏日抄ニモ弁シタ。此文ニ其字十二アリ。戯タ文也。此亦一体也。此文ハ百三十七字ノ文テ辞簡ニ語足也。

盗取別書文、文字カシタヤラウ。后人カシタヤラウ。管子八十一篇アリ。辞在文字中、サツハト別ニ見ヘタ。

不合、他人ノ辞ヲ取テ盗剽シタホトニ、意ト辞トクイチカウテ不合也。

題注、豈徐李有以折之歟。李暹訓カ注。言旧之九卷ヲ分析シテ作十二卷也。

其伝曰、伝ハ注也。

題注、周安王、周末ノ君也。

注、又手一、指ノ其錯ルト又牙ト齒トハ不合者也。喩ニ云也。

衆一、或自多ク聚斂他書成此書歟。或云、衆ハ衆人之義、ソレハ上ノ義ト同様ニナル也。

儘見立行者一、ヨリアウテモセヨ、一人シテモセヨ、無代ニステマイ処アリ。此語勢面白也。立言トハコレヨリ以前ニナイ議論ヲ申ス。万世立可行者也。発意ハ注シタ義也。

蔵其家、カウ雜乱シタソ。削タリ注シタリスルホトニ公界ヘハ恐入タ。子弟ノ一覽ノ料ト云ントテ蔵柳家云々。

ここでは仮名抄で書かれ、わかりやすくなっていることもさることながら、五山版への書き込みから読解がさらに深まっている。東北大学蔵本『五百家本』書き入れ①における『黄氏日抄』や宋景濂『文憲集』については紹介するにとどめ、題注や本文註に関する注解まで行っている。また、本文に関する仮名抄も詳細になっており、読者のために解釈の便宜をはかっている。

解釈が深化しているのは歴代禅僧の考究成果の賜物である。『柳文抄』にその解釈を引用されている禅僧には、夢巖祖心(？)一三七四)・中巖圓月(一

三〇〇)一三七五)・義堂周信(一三二五)一三八八)・心華元棟(生没年未詳)・雲溪支山(一三三〇)一三三九)・無因宗因(一三二六)一四一〇)・在先希讓(一三三五)一四〇三)・伯英徳俊(？)一四〇三)・太白真玄(？)一四一五)・岐陽方秀(一三六一)一四二四)・惟肖得巖(一三六〇)一四三七)・江西龍派(一三七五)一四四六)・勝剛長柔(？)一四五六)・瑞溪周鳳(一三九一)一四七三)・東岩(未詳)等がある。中でも江西龍派と惟肖得巖の抄が頻繁に引用されている。

書陵部所蔵『五山書目』や両足院所蔵『書籍目録』に「柳文抄 太白真玄」とある他、『五百家本』書き入れには柳文に関する抄物の存在が確認されるため、両足院所蔵『柳文抄』以外にも柳文の抄が存在していたことが窺える。五山版『五百家本』と同様、『柳文抄』は禅林の柳文解釈の実態を説明するのに欠かせない資料なのである。

六、柳宗元に関する詠出

柳宗元の作品に関する解釈は時代が降るごとに深化していることが分かったが、一方で柳宗元の作品に感銘を受けた禅僧は、柳宗元に関することを自身の作品に詠み込んでいる。初期(鎌倉時代末期)南北朝時代)において、虎関師鍊は「答藤丞相」(『濟北集』)の中で、国に必要な文章として柳宗元が実践した散文を奨励し、中巖円月は「中正子外篇之一敍篇」(『東海一漚集』)の中で、柳宗元の詩文について、その詩想の深遠さと、そこから創出される諷諭を含んだ文章を高く評価している。

文章を高く評価する一方、龍泉令淳は号頌として柳宗元の作品の中から「愚溪」(『松山集』)を詠じ、夢巖祖心は柳宗元の作品を引き合いに出して字説を製している。禅の宗旨が関係する偈頌や法語の中で、柳宗元の詩文が引用されていることから、初期にあつてその作品が賞翫を許されていたことが分かる。

初期に高い評価を得た柳宗元は、中期（南北朝時代末期～応仁の乱頃）以降も禅僧の詩文にたびたび登場することになる。禅僧の作品に見られる柳宗元に關することを精査していくことは、禅僧の柳宗元に対する接し方がいかに変化しているかを確認するために必要である。

七、柳宗元受容における課題

柳宗元の作品が中国から移入され、禅林に浸透していく過程を見てきた。主として写本『音弁本』、五山版『五百家本』、抄物『柳文抄』、禅僧の詩文詠出の四視点から検討した。これら四視点には、それぞれの問題が残されている。

写本『音弁本』については、当期の訓点を知るのに格好の資料である。解釈の変遷を説明していくに当たり、重要な痕跡を残していると言える。

五山版『五百家本』については、三点の問題が残されている。まず第一点は、書き入れが豊富になされている『五百家本』のそれぞれについて、誰が書き入れたのかを特定することである。これは、それぞれの本の書き入れを比較し、校合することで判明するものと思われる。第二点は、禅林に行われていた柳宗元に関する抄、講義を整理することである。『五百家本』には同一の抄・講義録が記されていることもあれば、全く異なるものが記されていることもある。これらを整理することができれば、禅僧間の考究状況がよりいっそう明確になってくるであろう。第三点は、引用されている注釈書を整理し、現在散佚した書を復元することである。例えば、書き入れの中には『音義本』の注釈が頻繁に引用されており、それらを全て抽出し、整理すれば、現在散佚している『音義本』を幾分か復元することができる。

抄物『柳文抄』については、抄者（第一書写者）を特定することである。同一の抄文が『五百家本』の書き入れに存することから、両書の校合を進めていくことで特定される可能性がある。また『五百家本』書き入れ等を総合して、

『柳文抄』の価値がいかなるものかを検討する必要がある。そして、解釈内容についても十分に吟味し、当期禅林で行われた柳文解釈がいかなる価値を有するのか検討しなければいけない。

禅僧の作品における柳宗元に関する詠出であるが、初期から中期以降へどのように変化しているのか検討する必要がある。両期の詠出作品を比較・検討することによって受容の変遷の特徴を導き出し、同時にその原因を考える必要がある。原因究明の資料として、『五百家本』書き入れや『柳文抄』が必要になってくると思われる。

まとめ

日本中世禅林における柳宗元の作品の受容過程と、その問題点について検討した。中世禅林において、柳宗元の作品賞翫の対象として確固たる地位を築いていたことが判明した。が、同時にその実態についてはいまだに不明な点が多々存することも判明した。

受容過程の実態を説明するには、まず写本・五山版・抄・禅僧作品集といった各種の成果が活用できるように、その基礎的事項を説明しなければいけない。基礎的事項を一つ一つ説明していくことで、第二期、すなわち鎌倉・室町期における日本漢文学受容の一端が明らかになると考えている。

〈注〉

- ① 玉村竹二著『五山文学』（至文堂 一九六五）
- ② 川瀬一馬著『五山版の研究』（日本古書籍商協会 一九七〇）
- ③ 柳田征司氏「抄物目録稿（原典漢籍集類の部）」（『訓点語と訓点資料』一一三号 二〇〇四年九月）
- ④ 各注釈書の特徴については、新海一氏「柳河東集の源流」（『國學院大學紀要』

一五、一九七七）・同『柳宗元集』以前・以後―「猷平淮夷表一首」再考―
（『國學院雜誌』八七―一〇、一九八〇）・戸崎哲彦氏「『柳宗元集』考（上）
―南宋『文苑英華』以前の『柳集』の種類・特徴およびその関係・系統を中
心にして―」（『彦根論叢』二八九、一九九四）・同『柳宗元集』考（下）―
詰訓本・百家注本・音弁本の特徴と『文苑英華』との関係を中心にして―
（『彦根論叢』二九〇、一九九四）に詳しい。

⑤拙論「日本中世禪林における柳宗元受容の研究―初期の場合―」（『中国古典
文学研究』第五号 二〇〇七）